

Title	ナポレオン・ボナパルトと5人の作家
Sub Title	Napoléon Bonaparte vu et jugé par cinq écrivains contemporains
Author	後平, 隆(Gohira, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.61 (2015. 10) ,p.17- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20151031-0017">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20151031-0017</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ナポレオン・ボナパルトと5人の作家

後 平 隆

## 序

要するに、ド・スタール夫人は非常に偉大な才能の持ち主で、極めて卓越した、才気煥発の女である。夫人は永く後世に名をとどめるであろう。夫人が私を貶さないで、私の味方についていたら、私は得るところがあったかも知れない、ということは確かである。

—— 『セント・ヘレナの物語』 ラス・カーズ

シャトーブリアンはあんな小冊子を書いたにもかかわらず、立派なフランス人である。

シャトーブリアンは生まれつき聖なる火をめぐまれていた。彼の諸々の作品がそれを証明している。彼の文体はラシーヌの文体ではなく、予言者の文体である。

……こういうわけであるから、貴下が可能であると思われることを考えていただきたい。貴下の考えを私に提供していただきたい。自由選挙か？ 公開討論か？ 責任を負うべき大臣か？ 自由か？ 私はすべてそれらのものを承諾する。(B. コンスタンへの依頼)

ここにナポレオンの歴史の最初の言葉をあえて記すにあたり、わたしは一種の宗教的感情にとられるのである。これは、カエサル以来この世界にあらわれたもっとも偉大な人物にかんすることなのだ。

(スタンダール 『ナポレオンの生涯にかんする覚書』)<sup>1)</sup>

1) 四つの引用文ともに『ナポレオン言行録』、オクターヴ・オブリ編、岩波文庫

もちろん「偉大」なるナポレオンのことだ、当時から毀誉褒貶の言葉は枚挙にいとまがないことはわかりきっている。だが同時代の人たち、それも常勝將軍に熱狂したり、妬んだり、あるいは恐れたりした軍人や政治家ではなくて、今から振り返りみればその時代に屹立している文学者は、この將軍から第一執政そして皇帝の玉座へと一気呵成に登りつめた男をどう見ていたのか。スタール夫人、シャトーブリアン、コンスタン、スタンダールと並べてみると、文学者と称されてはいるものの、そのじつどの人も、文学者すなわち小説家、詩人あるいは批評家という、現代人にはなじみの枠組みから大きくはみ出している人ばかり。どの人もいわゆる文学的営為にばかりいそんでいたのではない。そもそもそれを許すような時代状況ではなかったし、彼らにもその気はさらさらなかった。政治家的野心満々、と言えないのはスタンダールくらいか。これには生まれた年がおおいに関係あるかもしれない。スタール夫人は1766年4月、コンスタンは1767年10月、シャトーブリアンは1768年9月の生まれだから、バスチーユ牢獄襲撃の年には全員20歳を超えている。1783年1月生まれのスタンダールだけがまだ子供である。ちなみにナポレオンの生年は1769年8月。

年齢だけみても、スタンダールを除く三人には、革命の激浪に翻弄されながら大洋を進む舟である祖国と命運をともにしている意識は強烈にあっただろう。たとえばシャトーブリアンの場合。反革命軍に身を投じ、やがてアメリカを放浪し、その体験をもとに書いた『アタラ』『ルネ』が評判をえて一躍時の人となり、そののちさまざまな紆余曲折を経ながらやがて政界の大立者のひとりになっていくシャトーブリアンだが、そのかれが後年華麗な筆で描いた大時代絵巻『墓の彼方からの回想』（以下、『回想』）の読者ならば、容易にそれを納得できるだろう。そのシャトーブリアンとナポレオンとの関係は如何に？とみれば、アメリカ渡航の考えが萌すや、たちまちその考えで頭がいっぱいになったことを思い出しながら、シャトーブリアンは『回想』を通じての持続低音である「ナポレオン vs シャトーブリアン」をこんなふ

うに響かせるのだ。「だれひとり私のことなど構わなかった。ボナパルト同様に、私は当時口の端に掛けられることもない一介の少尉だった。二人とも同時期に無名から出発したのだ、私は孤独のなかにわたしの名声を求めするために、いっぽう彼は人間のあいだにかれの栄光を求めために<sup>2)</sup>」。

まるで自分が全ヨーロッパの征服者のライヴァルでもあるかのように、自分一個の行く末とナポレオンのそれとを引き比べるこのような語り口は確かに滑稽に見えなくもない。したがってある方面からはシャトーブリアン一流の肥大した自我意識の表れとして、それに嘲笑が浴びせられてきた。今から振り返ってみれば、世界中でナポレオンを知らない人はいなくても、シャトーブリアンの名前に反応してその風采を思い描ける人は、果たしてどれだけいると言うのだろうか。その数は微々たるものに違いないし、事情はフランス本国ですら変わらないだろう。

しかし『ナポレオン言行録』に収められている引用文をみよ。皇帝ナポレオンは、「予言者の文体」を駆使する「聖なる火」の持ち主として、自分に敵対しつづけ「あんな小冊子」をものしたシャトーブリアンを「立派なフランス人」であったと述懐しているのだ。いったい「あんな小冊子」にはなにが書いてあるのだろうか。

スタール夫人の場合はどうか。ナポレオンは彼女を嫌い、遠ざけ、迫害した。彼女が書いた『追放十年』は、皇帝の命令によってパリから40里以遠へと追放され、やがてフランスの地に居住することもかなわず、ついにロシア遠征軍に追い立てられるようにして、かろうじてサンクト・ペテルブルク、フィンランド、ストックホルム経由でイギリスへと逃れざるをえなくなった顛末の記録でもある<sup>3)</sup>。それを読むと、彼女が、敵の存在を破壊するまでは迫害の手を緩めない執拗な意思の対象になっていることが理解でき、逃避行のあいだ彼女から離れなかった身に迫る恐怖感すら伝わってくる気がする。

2) *Mémoires d'outre-tombe*, Livre 5 chapitre 15 以後『回想』

3) 拙論「レカミエ夫人 1」で、厚い交友関係を保つレカミエ夫人に追放の憂き目を訴えるスタール夫人の姿を紹介している。

いったいスタール夫人はどんなふうになポレオンを「貶した」というのだろうか？ それをつぶさに知るためには、皇帝の治世下に継起した状況のひとつひとつに、彼女がどのような言動で反応したかを検証する必要があるだろう。しかし状況への反応とは別に、ここに彼女が残した一冊の本があり、そこにわれわれはスタール夫人がナポレオンに下していた評価の集約的表現を読むことができる。彼女の死から一年後の1818年に出版された『フランス革命についての考察』<sup>4)</sup>がその本である。

この著作は出版まえからひとびとの口の端に上っていたらしい。たとえばスタンダールは1816年にその原稿を目にしていたと推測されている。その推測の根拠として挙げられる1816年12月26日付けの友人クロゼにあてた手紙の一節。「わたしが知っているスタール夫人のこの仕事は別種の物議をかもすことだろう。会話では豊富な考えと才気を発揮するのに、印刷物ではからっきしだめなこの哀れな女性は、わたしの見るところ、受けを狙って響感を買おうとしたのだ。この本のあとでアメリカに発つと欲していたけれど、コペーに向けてパリを離れる前日に出版されるだろう」<sup>5)</sup>。

これはまたずいぶんと辛辣な物言いである。スタール夫人のペンは碌なものしか産み出していない。こう極めつけられては、さぞ色をなすスタール夫人ファンもいるだろう。はたしてスタンダールの悪口がスタール夫人の「印刷物」全般に当てはまるかどうか、それはひとまず措く。しかし手元にある『考察』は、ページをめくっていけば、これを饒舌と形容すべきか深厚と形容するのが適切か判断に迷うけれど、ともかくびっしりと活字のならぶ600ページ余の本である。その『考察』をスキヤンダルになることをわざと狙った際物だということのだから、スタール夫人が作り上げたナポレオン像にたいするスタンダールの憤激のほどが知れる。スタンダール自身は二つのナポレオン伝を書いた。最初の『ナポレオンの生涯』は、皇帝の百日天下のあいだ逃げの一手だったルイ18世がパリに帰還し、今度こそゆったりと王座に腰を

4) Madame de Staël, *Considérations sur la Révolution française*, présenté et annoté par Jacques Godechot, Tallandier, 1983 以後『考察』

5) Stendhal, *Correspondance I*, La Pléiade, p.844

おちつけることができたころ、つまり皇帝に協力した軍人たちが一転して窮地にたたされた時期に執筆された。さきに紹介した友人クロゼ相手の放言が、この伝記ではつぎのような書き出しに変容している。「わたしはある中傷文に答えるためにナポレオンの歴史を書く。これは無謀な企てである、なぜならばこの中傷文は、四年まえから地上のあらゆる権力による復讐の的になっているひとりの男にたいして今世紀第一の才人が投げつけたものだからである。わたしは意見の自由な表現を縛られた状況にあり、才能にも欠ける、それなのにわたしの高邁なる対抗相手はすべての違警罪裁判所の補佐を受けている」。<sup>6)</sup>

「からっきし駄目」という烙印を押した著述家を、こちらでは今世紀第一の才能と持ち上げているのがなんともおかしいけれど、しかしこの決然とした書き出しは、『考察』のなかで展開されているナポレオン批判、いや批判というよりむしろ断罪に近い批判的検討の数々にたいする憤懣やるかたないスタンダードの姿を鮮やかに伝える。失墜した皇帝擁護の意欲をあからさまに示しながら、ヨーロッパ中に名声をとどろかせる著者に敢然と立ち向かう書き出しであると言わなければならない。

ところでシャトーブリアンの「小冊子」にしろ、スタール夫人の『考察』にしろ、どちらも、国民の期待を一身に集めた若き將軍ボナパルトがやがて執政政府のトップの地位を占め、ついにはフランス皇帝の座へと権力の階段を一気に駆け上り、ヨーロッパのほとんどの国をその鷲の爪で押さえつづけることができたのはなぜかという、まるでスフィンクスの謎のような空前の課題に挑んでいる。ふたりともに、皇帝の意向次第では自分自身を危地に追いやりかねない立場にあるにもかかわらず、革命以来の政治状況や人心のありよう、ボナパルトの人柄から彼を取り巻く人々の打算の数々まで、さまざまな切り口からナポレオン・ボナパルトという謎を解明しようと必死の様子が明らかである。

ところがスタール夫人、シャトーブリアンの論述がともに纏う綿密な論理

6) Stendhal, *Vie de Napoléon Mémoires sur Napoléon*, Stock, 1998, p.15

展開に対して、いっぽうスタンダールのペン先からは、決然とした書き出しとは裏腹に、ナポレオン擁護の堂々たる論陣を張るといったような印象は受けない。たとえば相手を論難し論破するまで戦う、というような。スタンダールが書いたのは論文ではなくて、伝記だから？ そうとも言える。しかし伝記にしては、伝記作者の個人的な思いが随所に色濃く点描されすぎてはいまいか。そもそもなぜ擁護の筆が伝記という形式を選んだのだろうか。

さらにもう一人バンジャマン・コンスタンが、ナポレオンという抗し難い現象にたいして取った精神のスタンスは、以上の三人のそれとはまた違っている。そのことはナポレオンがコンスタンに協力を依頼した引用文からも容易に見当がつくだろう。『征服精神と篡奪について』という現在ポケット版でも入手できる彼の有名な本は、シャトーブリアンやスタール夫人の弾劾文と重なる部分やそうでない部分を含みながら、文明のありようの過去と現在という独特の視点からナポレオンの歴史的位置を探った論難の書である。ところがその著者は、エルバ島を脱出してきた皇帝から「帝国憲法付加条項」を起草するように依頼されるや、態度を一転、激しかった批判の矛をあっさりと収めてしまい、その結果仲間の自由主義者たちから猛烈に指弾される羽目に陥ってしまう。コンスタンは『百日天下の回想』を書いて苦しい弁明に努めるしかなかった。彼もまた滔々と流れる時代に必死に棹さし、急旋回しながら激流を下っていった一人なのだ。

※

ナポレオン・ボナパルトという驚異的現象が、自分の頭の前から爪先までをすっぽりと包み込み、魂の鬘にまで支配の触手を伸ばしてくるのをひしひしと感じながら、否応なしに、起き伏しその解説に人生のぎりぎりの選択をかけざるをえなかった同時代の作家たち。かれらはまた、今風にいえば一流の文明批評家でもあったが、その具眼の士がとらえたナポレオンの姿はどのようなものであったか。

われわれがこれからやろうとしているのは、射程の長い鋭敏な文明批評眼をもつ作家が懸命に書いたナポレオン解説の記録を熟読玩味し、いまなお汲み取るべき教訓があるとすれば、その言葉を拳拳服膺すること、それ以外のものではない。ナポレオンの遺産が巨大で、時間的にも広範囲に及ぶことは言うまでもない。ワーテルローでの戦いで勝利したイギリスは、敗者ナポレオンをアフリカ大陸南端の孤島セント・ヘレナへと流したが、そこでナポレオンは随行者のひとりラス・カーズの誘いによって、彼を相手に回想録を口述筆記した。『セント・ヘレナの覚え書』と呼ばれるこの回想録は、しかし失意の皇帝のたんなる思ひ出話や愚痴の寄せ集めではない。それどころか、それはナポレオンがはるかアフリカ南端の小島からヨーロッパをめがけて放った、いやのみならず後世での栄光を狙って放ったプロバガンダだという見方もある。たしかにナポレオンは若き將軍時代からプロバガンダの名手であり、さまざまな手段を使ってきた。エジプトからパリをめざして発信された『ナポレオン戦報』はその一例にすぎない。

さらにまた時間を若干下ってみると、ナポレオンの甥ルイ＝ナポレオン・ボナパルトは、叔父にならって皇帝の座についてしまう。ナポレオンの弟ルイとジョゼフィーヌの娘オルタンスとの結婚から生まれた第三子であるこの甥は、当時の知識人のほとんどから無頼漢としてしかみられていなかった。ところがかれは1848年2月の革命で七月王政が転覆したあとの共和国大統領選挙に出馬、対立候補（そのひとりが民主主義勢力を率いたラマルチーヌ）に圧倒的な差をつけて当選。しかも彼は大統領の地位に満足できなかった。なぜなら1848年11月制定の共和国憲法第45条は大統領の任期を四年、再選は可能、ただし四年の間隔をおくべしとの制約をもうけており、大統領はこの制約を嫌ったのである。ルイ＝ナポレオン・ボナパルトは、大統領の任期満了まえに自らクーデタの首謀者となって議회를制圧して、まんまと皇帝へと変身を遂げた。こうして第二帝政が成立する。ナポレオン・ボナパルトは1821年5月5日孤島で没するけれども、甥は皇帝となり、ボナパルティズムの命脈はその後もながく保たれることになったわけである。

しかしわれわれの精読の試みは、ルイ＝ナポレオン・ボナパルト大統領自

作自演のクーデタに抗議して逮捕収監された議員たちの一人アレクシス・ド・トクヴィルが、皇帝ナポレオン・ボナパルトについて書き残した断片的な文書を検討して、一応の区切りをつける。『フランス二月革命の日々』の著者は、議員として、また外務大臣として、ボナパルト大統領をまじかに見、親しく言葉を交わしながら、クーデタ必至の状況が醸成されていくのを憂える記録をも残している。したがってトクヴィルに寄り添いながら、ナポレオン・ボナパルト亡き後のフランスを視野にいて、さらに考察の幅を広げることできるかもしれない。しかしわれわれにとってそれは後日談に属する事柄だろう。なぜならボナパルティズムの消長を見届けることがわれわれの目的ではなく、眼目とするのはあくまでも、革命から第一帝政崩壊にいたる激震の時代に、千辛万苦をなめながらそれを生きた知識人たちの必死の脳髓から搾り出された思考方法とその根拠を丹念に読み解くことにあるからである。したがって『アンシャン・レジームとフランス革命』の著者ならではの皇帝ナポレオン・ボナパルトに関する見方を検討してとりあえずの区切りとしたい。

ところで『アメリカの民主政治』と並び称される『アンシャン・レジームと革命』は、革命を導いてしまった要因の探求部分だけが公刊された。残念なことに、革命とナポレオン編として構想されたこの本の続編は、著者の早すぎる死によって中断され、作品として世に送り出されることはなかった。しかしそれでも残された断章の数々を寄せ集めてみれば、トクヴィルのナポレオンにたいするアプローチの仕方はおよそ見当がつく。ちなみに彼がこの世に生を受けたのは、1789年7月14日のバスチユ襲撃からほぼ16年後の1805年7月29日。われわれが取り上げる人たちのうちでもっとも若く、ナポレオンの命運が尽きたワーテルローの戦いがあった1815年6月の時点でいまだ10歳。したがってほかの人たちのように皇帝の動向次第で自分の境遇が激変することはなかったし、『アンシャン・レジームと革命』の素案が練られるのは1851年であるから、その時点においてトクヴィルは、ナポレオン・ボナパルトを現在進行形の威嚇的現象として観察したわけでないことは断るまでもない。彼にとって革命とナポレオンの輪郭は、アーカイヴで

の博搜が明かしてくれたアンシャン・レジームの実態から放たれた放物線上に描かれるべき研究対象にはかならない。そのことを如実に示すのがかれの語り口である。シャトーブリアンの「あんな小冊子」とスタンダールによるナポレオン伝が、ナポレオンにたいする態度に百八十度の違いこそあれ、どちらも書き手の情動をさらけ出す文章で綴られているのにくらべると、トクヴィルの文章はいかにも冷静な探求者のそれである。そしてスタール夫人とコンスタンの語り口は、かなりの程度にシャトーブリアン寄りといえるだろう。

\*

それではこの五人の作家を政治的な信条で色分けするとどうなるだろうか。王政復古時代のシャトーブリアンは *ultra* (過激王党派) のレッテルを貼られ、スタール夫人とコンスタンは自由主義陣営の代表格であり、スタンダールは自分をジャコバンだと述べている。一見したところかれらの立場ははっきりしている。

この年長の四人と比較してみると、一番若いトクヴィルの場合、思想に心情がぴったり寄り添っている感じがしない。そういう印象を抱かせるエピソードのひとつとして、かれの人生にとって辛い一齣となった出来事がある。1830年7月の革命はブルボン家最後の王シャルル10世の亡命とオルレアン家のルイ・フィリップの即位によって決着し、その結果七月王政が始まったのは承知のとおり。そのおりに新王は官僚たちにたいして、自分に忠誠を誓う宣誓を求め、若き官僚であったアレクシスは、家族内の反対派を押し切るかたちで、宣誓をした。身内には、それに強硬に反対する者たちもいたから、アレクシスの宣誓は考えた末の決断であった。トクヴィル家の人々は、ながらくブルボン家の王の下でキャリアを積み重ねてきていたのである。たとえば父親は、アレクシスが法学の勉強を終えた1826年に、セーヌ・エ・オーワーズ県の知事としてヴェルサイユ県庁に務めていたし、アレクシス自身も翌年にはヴェルサイユ裁判所の判事・監査官に任命されている。それでは家族からの反対を押し切った決断は、彼を七月王政積極的支持派に分類する

ことを許すものだろうか？その疑問にたいする答えは、アレシスが宣誓をしたあと、五年後にはかれの妻となる女性にあてた手紙の一節に見つかる。「ぼくの良心に恥じるものは何もない。それでもやはりぼくは深く傷ついている。この日を生涯で最悪の日々のひとつに数えることになるだろう」と。果たして彼は七月王政をつうじて政治の表舞台に立つ人たちの批判者として終始することになるだろう。このようにトクヴィルは屈折した内面を抱えて活動するしかなかった。

しかし、実際のところ、簡明な分類がほとんど意味をなさないのは、トクヴィルに限らない。『憲章に則る君主政について』を書いたシャトーブリアンは、過激王党派中の変り種ともいえる存在として、ルイ 18 世の君寵を蒙ること少なかった。それどころか、王はこの過激王党派の一領袖にたいする軽侮の念を周囲に洩らしてさえいる。またナポレオンの賛美者スタンダールが自称ジャコバンであったというのが、かれのジャコバン主義がどの程度政治的に発揮されたかあやしいとはいえ、いかにも面白い現象ではないだろうか。なぜなら若き將軍だったころのボナパルト本人が、絶対的権力への途を突き進む過程でもっとも恐れ、警戒したのは、王党派の面々よりも、むしろジャコバンであったのだから。同じことはほかの二人についても指摘できる。スタール夫人は將軍ボナパルトに心酔していたし、コンスタンについては、かれが皇帝批判者から協力者へと転身した際にかつての同士から痛罵を浴びせられたのは、さきに紹介したとおり。

混迷の極にある時代は沸き立ち、秩序感覚を養うべきものを失った人心はすさび、一貫した思想を死守しようとする姿勢が、ときには無益なあがきや、単なる依怙地に見えてくることもあっただろう。ほぼ二十年のあいだ時代の巨大な中心軸としてフランスひいてはヨーロッパ世界を勢いよく回し続けたのがナポレオンであった。この間すべての物事、すべての人間は、この巨大な中心軸と連結して回る歯車でしかなかったような印象すら受ける。しかしまた一方では、考える葦ならぬ考え続ける歯車は存在したのであり、われわれがこれからやろうとするのは、音の比喩を使うならば、まさに旋回しながら考える歯車が発したさまざまな音を拾い、それに耳を澄ましてみることで

ある。

※

まず手始めに、同時代人の四人—スタール夫人、シャトーブリアン、コンスタン、スタンダールのだれもがナポレオンのうちに認め指さした特質を取り出してみよう。かれらの犀利な文明批評の鏡が共通して映し出した巨人の姿には、たとえ側近であれ近視眼的知性のまなこでは捉えがたい真実が宿っているに違いないから。そのあとで彼ら一人ひとりに特有なナポレオン評価のやりかたを順次に検討したい。スタール夫人、ついでシャトーブリアン、コンスタン、スタンダールの順に取り上げ、締めくくりをつけるのがトクヴィルである。

なぜスタール夫人から始めるのか。四人のなかで一番の年長者だから？いやそれにとどまらない利点があるからである。ギロチンの刃から迸る血潮とともに落とされたルイ 16 世の首は、「自由」と「平等」という夢の残酷な形象化であったはずなのに、1793 年 1 月の王殺しから数年を経て、またしても国民の多くはナポレオン独裁のくびきにおとなしく繋がれた。夢は悪夢へと変わった、と感じる知識人がその時代に多数いたが、その理由を時間軸に沿って出来事をならべながら追求しているのが、ほかの誰にもまして『考察』の著者だからである。

『考察』の進行に従うことのメリットの第一は、ボナパルトが政治舞台の前面に颯爽と姿を現して以来の主要な出来事を順次におさらいできること、第二には才気煥発のこの女性が若きボナパルト将軍があれよあれよという間に皇帝ナポレオンへと脱皮してゆく驚きの過程をどう解釈しているか、それを具体的に知ることができること。さらに副次的には次の事情も無視できない。すなわち手元にある『考察』のエディションでは、フランス革命研究の泰斗 Jacques Godechot が編者としてかなりの分量にのぼる詳細な注を施していて、それを読み進んでいくと「これはスタール夫人の誤認である」「曲解である」といったような読者にたいする注意喚起の警告板が目に入る。それは『考察』の読者に、ナポレオン現象に強い光を当てている照明源自身の

立脚点や照射角度にもまた気を配る必要のあることを教えている。これが第三のメリットである。

失墜した皇帝がセント・ヘレナ島で、もし彼女が自分の陣営に入ってその雄弁をふるってくれたらよかったのにと悔しがったように、スタール夫人は人々の耳目を集める存在であったうえ、彼女の口と筆からは皇帝を苛立たせる言葉がいくらかでも飛び出してくる。こんな女をパリに野放しにはできないと、皇帝は追放処分を命じた。夫人に「ギロチンよりもつらい」と言わせた追放の日々がこうして始まる。その長い絶望の期間を叙した『追放十年』は、そのなかに自伝的要素をふんだんにちりばめ、とりわけ後半部分にいたっては逃亡記の性格を濃厚に帯びつつ、随所にこれは政治風刺文書かと思わせるような批評の切っ先をひらめかせる複合的な記録として残った。夫人のナポレオンにたいする考えのエッセンスを窮めるためには、『考察』と『追放十年』を合わせ読むことが必要であろう。

スタール夫人につづいてはシャトーブリアンを取り上げる。彼は1814年3月30日の日付をもつ『ブオナパルテとブルボンについて』という小冊子を4月4日に公表した。まず日付に注目したい。ナポレオンがとてつもない大軍を率いて敢行したロシア遠征（1812年6月24日～9月14日）が酸鼻を極める敗走で終わったあと、ロシア皇帝アレクサンドロー一世とプロイセン王フリードリッヒ・ヴィルヘルム三世が対仏連合軍の最高司令官としてパリに入城する。それが1814年3月31日のこと。日付に注目すれば、シャトーブリアンの小冊子がきわめて時事的性格をもつことがただちに推測できる。

そのあと事態は速やかに進行する。4月3日上院がナポレオン皇帝の廃位を宣言、4日ナポレオンは息子ローマ王（1811年3月20日生まれ）を後継者に指名して退位、20日ナポレオンはフォンテーヌブローで兵士に別れを告げ、エルバ島へと向かう。5月3日ルイ18世、パリ入城。

こんなふうに必要な出来事だけ列挙してみると、ルイ18世が亡命先から帰還して王座につくまでの経過がいかにスムーズで、事態はしかるべき形で

なんの問題もなく決着したように想像してしまう。ところが実際は違った。ロシア皇帝は5日早朝3時にナポレオンの全権使節たちを迎えて次のように述べた。「私はブルボン家にはまったくこだわらない。ブルボン家には知っている人がいない。ローマ王に摂政をつける案については、イギリスがこれにもっとも強硬に反対している以上、それは不可能ではないかと危惧する。わたしとしては摂政案で構わないのだが、しかし同盟国の意向を汲まずに行動することはできない」。連合軍総司令官の立場にあったアレクサンドロー世でさえ、はっきりした返事を与えられないでいるのがわかる。勝った同盟軍側の意見は分かっていたし、なによりも敗戦国民がこの危機的事態をどう收拾しようと考えているのか、計りかねている様子である。たとえ勝っても、フランス国民の意向に逆らう決着案を無理強いはできないのだ。つまりロシア皇帝を頭とする同盟軍はフランスの世論がどちらに傾くかを注視しているわけだ。

シャトーブリアンの小冊子は、日付からわかるように、その注視のさなかに投げ込まれ、そして世論がブルボン家復帰容認の姿勢をとるのにおおいに貢献したと評価されている。冊子の正式なタイトルは『ブオナバルテとブルボン そしてフランスの幸福とヨーロッパの幸福のために、われわれの正統的君主たちに与する必要性について』というもの。著者の訴えは一目瞭然である。ボナパルト陣営にとっては、この冊子はさぞかし延命の頼み綱を断ち切ろうとする鋭い刃に見えたことだろう。

またシャトーブリアンは、切羽詰った状況下で一気呵成に仕上げた小冊子とはべつに、『墓の彼方からの回想』のなかで生涯のライヴァルであるナポレオンについて多くのページを費やしている。感情露わな文章で綴られた冊子のナポレオン像を補完あるいは補正し、彼の筆が刻み上げたボナパルト像の全貌を見るには、やはり『回想』のページをじっくりとめくってみなければならない。

シャトーブリアンのつぎには、コンスタンが彼独自の文明論的角度からナポレオン批判を展開した『征服の精神と篡奪について』を検討する。かれの

場合は、先に紹介したように、自由主義陣営の人々から裏切り呼ばわりされた「帝国憲法付加条項」検討依頼の受諾という大きな躓きの石(?)があり、かれは浴びせられた非難をまえに弁明につとめなければならなかった。その弁明の書『百日天下の回想』を素通りすることはもちろんできない。

コンスタンについてはスタンダールが書いたふたつのナポレオン伝を開いてみよう。スタンダールの場合、なんといっても問題になるのは、スタール夫人の周密なナポレオン批判の矛先をかわし、ナポレオンを擁護し、賛美するための文章を綴るはずと読者に予想させながらも、なぜその反駁の文章が批判者のような論述形式によらずに、ナポレオンの伝記として結実したのかということではないだろうか。論述と伝記とでは、それぞれが語りうるものはおのずと違うはずだろうから。

そして最後にトクヴィルが残したナポレオンに関する断章を検討して、同時代の知識人の目をかりて見たナポレオンとかれの時代から、現代のわれわれが汲み取るべきものがあるとするれば、それがなにかを検証する試みの締めくくりとしたい。

それでは長い前書きをこの辺で切り上げて、手順どおりに、まずはナポレオンに注がれた批判的視線がおしなべて認識した特徴を一瞥することからはじめよう。